

写し絵の種板



写し絵は、人物・景色などを描いたガラス板(種板)を、木製の映写機を用いてスクリーン(壁や白布など)に映しだし、鳴り物や口上に合わせて動かし演じる芸能で、後には「幻燈」と呼ばれました。幕末から明治時代後期まで各地の寄席やお祭りなどで興行され人気を博しました。後には説経節の語りに合わせて演じられるようにもなりました。都市部はもちろん農村部でも人気で、飯能市域でもかつては数多く公演されていました。

なお、使用者や使用時期など、この種板に関する詳細については残念ながら不明です。